

# 礼拝さいこう

## 新型コロナウイルスに直面して教会は・・・③

教会音楽室長 江原美歌子

「詩と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。」  
(エフェソの信徒への手紙 5:19-20)

「ウィズ・コロナ」1年。困難の中にあっても、礼拝と賛美は止むことなく、そして賛美の思いを携えての「語り合い」は様々な形で導かれてきました。主にある交わり、「語り合い」によって、「我一汝」を知り、教会、礼拝とは何かを学びあっています。今号においても、各地から寄せられた発信と気づきを通して、礼拝と賛美を再考する機会となりますようお願いしています。

### Index

- 1) 「教会の主」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岡田有右（那覇新都心）
- 2) 「釧路教会での礼拝～コロナ危機のなかで～」・・・・・・・・奥村敏夫（釧路）
- 3) 「コロナ危機の中での教会活動」・・・・・・・・・・・・・・・・酒井朋宏（別府国際）
- 4) 「礼拝を止めないために」・・・・・・・・・・・・・・・・田代 仁（前橋）
- 5) 「公開か、非公開か、それとも限定公開か」・・・・・・・・平野健治（平塚）
- 6) 「しなやかに」・・・・・・・・・・・・・・・・山川明美（南名古屋）
- 7) 「コロナ危機における東京北教会の選択」・・・・・・・・山口千幸（東京北）
- 8) 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている」・・・・・・・・杉本拓哉（江波）
- 9) 事例紹介に応答して～応答コメント・・・・・・・・濱野道雄（鳥栖）
- 10) 新しい賛美歌紹介・・・・・・・・・・・・・・・・教会音楽室
- 11) 瑞穂教会オンライン奏楽者講習会・・・・・・・・木内汐路（瑞穂）
- 12) 「歌わない」ということ・・・・・・・・・・・・・・・・片山寛（和白）
- 13) 山形教会の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・青山祐一（山形）
- 14) 第1回教会音楽カフェ報告
- 15) 礼拝と賛美歌著作権Q&A・・・・・・・・・・・・・・・・教会音楽室

# 新型コロナウイルスに直面して教会は・・・

## 「教会の主」

沖縄は今、新型コロナウイルス感染により3回目の緊急事態宣言中です。1/24からオンライン通信による礼拝を再び初めます。ズーム機器のない方は、携帯電話の声で礼拝に参加します。金曜日には週報が届きます。

第1回目の緊急事態宣言の際、2020/4/7に臨時役員会をもちました。何としても礼拝を守りたいという思いと、高齢者や基礎疾患のある方の不安を考え、多くの意見が出ました。緊急事態宣言は「不要不急の外出を控えるように」と言います。礼拝は不要不急なのか。役員会は一人ひとりの命の安全を考え、オンライン礼拝を始めることに教会員の下承を得ました。ズーム・携帯・YouTubeなどを通して、共に集う会堂での礼拝がそれぞれの場所へと移り拡がっていきました。役員会では感染防止に万全を期すために、「新型コロナウイルス感染症拡大予防ガイドライン」を作成しました。新型コロナウイルスは誰でもが感染するもので、たとえ患者になったとしても責めないことを話し合いました。

新型コロナウイルスは私たちの関係を遠ざけ無関心にさせ、分断します。教会が今できることをやっとうと話し合いました。教会員同士が連絡を取り合い励まし支え合う。週報を教会に関係するすべての人に次の礼拝までに届ける。そのことを通して、お一人おひとりの思いや生活を知らされました。そしてコロナの状況下にあつて厳しい生活をしいられている野宿

## 那覇新都心キリスト教会 岡田有右

の方々を訪ねる「夜回り」は休むことなく毎週続いています。

礼拝での賛美は座ったままで小さな声で歌う。また声を出さずに心の中で賛美する。また、普天間基地ゲート前でゴスペルを歌っています。会堂の中での賛美から基地ゲート前へと場所を移し、人も賛美歌自身も解放されています。沈黙の賛美も、神さまが与えてくださった恵みです。

コロナの影響下にあつて、数えきれない恵みをいただきました。那覇新都心教会は、東京北教会が掲げる全国支援・地域協働プロジェクト「多文化共生」に賛同教会として参加させてもらっています。2020/5/31（ペンテコステ礼拝）にズームを通して合同礼拝を持つ事がゆるされました。また2020/1/21に天に召されたHさんのお孫さんお二人が、彼女の信仰を引き継いで昨年11/29に信仰告白しバプテスマを受けられました。それは彼女の一番の祈りでした。

主イエスは、重い皮膚病を患っている人に手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われた。（マタイ8：3）近寄らない・係わらない・無関心と分断がもたらされる中、ディスタンスが求められます。病のただ中にあり交わりを断たれているその人に、イエスさまが手を差し伸べられ触れられます。主イエスは愛する者の故にディスタンスを破られる。三密を超えられるのです。これからの歩みを、教会の主であるイエス・キリストにお委ねします。

# 「釧路教会での礼拝～コロナ危機のなかで～」

釧路キリスト教会 奥村敏夫

## 1. 私たちの教会の特徴

人口減少と高齢化が進む地方教会は危機を迎えている。稀に教会に来られるかたがたを待ち続ける旧来型の教会を、基本的なところから捉えなおしてみようという試みを始めた。

「4つの礼拝」の始まりである。「教会」をダイナミックス（動態）として捉え、また地域（伝道圏）へのアウトリーチをやってみよう取り組んでいる。①会堂での日本語礼拝 ②会堂での英語礼拝（写真） ③厚岸地区礼拝 ④弟子屈地区礼拝、の4つの礼拝を続けている。徐々に教会員の中に意識改革が起こってきた。①を基盤としながら、②は市内外の技能実習生（主にフィリピンの方々）20数名の出席。③④はかつて複数教会があったが今は“0”になった地域で牧場や公共施設の一室を借りて（それぞれ片道1～1時間半）定期集会を持ち、教会の総会はこれらすべてを“正式な教会の礼拝”と位置付けて礼典も行われている。

## 2. コロナ危機への取り組み

手指消毒やマスクの着用、換気と座席に十分な間隔を置くなど、殆どの教会が取り組んでおられることに加えて、最近滅菌効果のある空気清浄機を3台購入して、年配者やその家族に不安のない環境で続けていきたいと願っている。しかしやはり本人

が不安を感じたり周囲から止められたりして出席できない方々もおられる。そのことも充分理解しながら、その対策の一つとして、昨年クリスマスからYouTubeによる同時配信を毎回するようになった。在宅の方々への対策にと考えていたが、まだ会ったことのない近隣の方々も時折覗いてくださっているようで反応もあり、思わぬ伝道の機会ともなっている。

## 3. 礼拝の持ち方の変化

礼拝の基本部分はずえず、しかし全体としていくつか変化してきている。礼拝の順序から会衆賛美を一つ削り（断腸の思いであった）、主の祈りは司会者が代表して祈り、会衆もそれに合わせて黙禱する。聖歌隊の賛美も、講壇に上がって1節のみ歌う。説教は普段よりは10分程短くなった（まだ長いと言われているが）。祝祷のことばの中に、同時配信で礼拝参加されている方々のことも加えることになった。30分に一回は窓を多少開ける。寒冷地につき短時間とし、厚着（コート・ジャンパーなど）を勧めている。座席間のスペース



を取るために、分級室と台所に座席をつくり落ち着ける場所を選べるようにしている。その他礼拝後の時間は無論会食はなく会合も極めて短時間に終わるように努めている。

#### 4. 主の晩餐式について(濱野先生に回答して)

このことについて論じ始めると紙面が足りないの、要点だけ触れさせていただくと、教会では基本的には(準備過程の衛生には細心の注意を払いながら)いつもと変わらずめいめいカップとキューブに切った食パンを用いている。原則第一日曜日の礼拝の中で執り行い、クローズでもなく、フルオープンでもなく、毎回「もしあなたがキリストを主と信じておられるならばお取りください。そうではない方には押し付けたくありませんので、‘見える説教’とも言われるこの式をご覧いただき、いつの日か心から信じてご一緒出来ることを祈っています。」とある種の招きとしても語りかけている。「教会の約束」の全員の朗読は主の祈りと同様の理由で変えて行こうと思っている。

濱野先生の前号のカウンターコメントは、バプテストの基本に基づいた的確なものであり、励まされる思いで読ませていただいた。昔司式者が‘按手礼’との関係で受按牧師のみ、という考え方に反発し声を上げていたものである。

「教会にこそ」委託されている礼典であることを確認できるならば、無牧師教会の方々が総会にて祈りつつ委託できる信徒の方を選び、教会の式典として続けることは健康的なことと信じている。

## 「コロナ危機の中での教会活動」

### 別府国際バプテスト教会 酒井 朋宏

別府国際教会では、昨年(2020年)3月末まで通常通りの礼拝を続けていました。しかし4月に入ってから、大分県の外出自粛要請、続いて国の緊急事態宣言が出されたこを受けて、約一ヶ月半の期間、教会での公の集会を休止することを決めました。

緊急事態宣言が解除された5月下旬から礼拝、祈祷会を再開しましたが、可能な限りの感染予防対策を取ったほうがよい(教会近隣の方々にも出来るだけ安心してもらえる)と考えて礼拝時間を30分程度に短縮したり、飛沫感染防止策として賛美歌を声にだして歌うことを止めたりしました。奏楽奉仕者にも負担がかからないように奏楽は『新生讚美歌』のCD演奏にし(今は事前録音の歌声を流しています)、来会者はそれぞれ歌詞を見ながら“心で賛美する”形にして今に至るまでその形が続いています。

感染拡大が少し落ち着いたように見えた頃に、賛美歌を声に出して歌うことを再開できないかどうかを信徒会で話し合いました。様々な事情から、感染リスクは最小限に抑えたいと強く望む意見や、賛美歌を声に出して歌うことは信仰姿勢や心の健康の面でも非常に大切だという意見など、それぞれの立場から色々な意見や希望が出されました。「声に出して歌えないことが辛い」という声がある一方で、「以前は歌うことに感情が傾いていて歌詞の内容を吟味することがなかったが、今は声に出して歌えない

分、歌詞をしっかりと味わうことができるようになった」という声もありました。現在でも賛美歌を声に出して歌うことは再開していませんが、私たちはこのコロナ危機を、大切なことは皆で一緒に祈って話し合い、自分とは異なる意見にも心を開いてお互いの立場を理解しあったうえで何事も決めていく、信仰に基づいた合意形成の機会としたい、と願いながら今に至っています。

一つ大変残念だったことは、別府市内で外国出身の方々や留学生の方々が、外国出身であるということや感染者が発生した学校の生徒であるという理由だけで、お店などへの立ち入りを拒否されたりする事例が発生したことです。この事態には別府市が素早く動き「コロナ差別」をしないように訴える声明の発表や啓発用ポスターの作成がなされ、私たちの教会も早速市役所からそのポスターを何枚か頂いてきて教会の外の掲示板に張り出しました（今でも続けて

貼ってあります）。ウイルスに対する不安が募るあまり、海外出身や遠方からの来会者への思いやりと配慮が失われることがないように、国際教会である私たちは特に願いながら、主に信頼しつつ教会活動を続けています。

大変な時期ではありますが、今年度は留学生3人が信仰告白をしてバプテスマを受けたり（間もなくもう一人予定しています）、1月にはベトナム人カップルの結婚式（写真）が教会で行われたりと、試練の中でも私たちの教会に色々な恵みを与え続けてくださる主に感謝しています。



中高生クリスマス

### 「礼拝を止めないために」

前橋教会の61回目の誕生日を迎えた2020/5/17から、教会の誕生日とされるペンテコステを迎えた5/31までの3週間、私たちは教会に集っての礼拝から家庭での礼拝にシフトしました。全国的には第一波のピークを越えた頃でしたが、市内での感染が増えたことを受けての判断でした。その間は土曜日に奉仕者が集まって礼拝を録画しyoutubeで限定配信したのですが、これは私たちにとって初めて

### 日本バプテスト前橋教会 田代 仁

の取り組みでした。

家庭での礼拝のために「席上献金袋」を作成・配布し、そこに日付と出席者名を記入して都合の良い時に教会に届けて頂くことで、礼拝出席者を減らすことなく、むしろ人数的には若干増えた状態でその期間を守ることが出来たのは幸いでした。また、インターネット環境がない方の為に通常の礼拝の時間に礼拝堂で動画再生を行い（非公式に）その場に

出席していただくという方法も取りました。こういった方法は、前橋市が車社会で公共交通機関を使って教会に来られている方がおられないからこそでしょう。

6月以降は教会での礼拝を再開し、幸いにも(2021年1月)現在も継続することが出来ています。ただし、礼拝出席を自粛せざるを得ない方たちもおられるのでyoutubeによる限定配信も継続しています。

現在は礼拝に当たって以下の方法を取り入れています。

- ①体調に不安のある時は家庭での礼拝を勧める。
- ②出席者はマスク着用、検温、手指のアルコール消毒徹底。
- ③最大100名程中定員24名とし、多目的ホールに映像を中継(1時間内)
- ④CO2モニターを会堂に配置し、800ppmを越えるのを目安に換気を行う。
- ⑤賛美歌は声を出さず、手話賛美を取り入れる。
- ⑥献金籠はまわさず、会堂入り口に設置。
- ⑦教会学校は警戒レベルが下がるまで休止、委員会等も最小限に。
- ⑧礼拝後は原則そのまま散会し、特に飲食を伴う交わりを自粛する。昼食が必要な場合は相互の間隔を十分にとる。

本音では声を出して賛美したいところですが、現状ではそれもできません。でも、声を出さだけが賛美ではないと私たちは手話賛美を始めました。後述する牧師就任式で声を出さずに賛美するためにみんなで一つの手話賛美を覚えたことがきっかけになったのですが、それでもなんとか賛美を表現したいという熱意がひとつの形になった姿だと思います。手話賛美は使う言葉がある程度限られているので、少しずつ慣れて手を動かして加わる人が増えてきています。また手話賛美を通して歌詞の意味を改めて深く受け止めながら賛美できるという声もありました。

通常の礼拝と異なるもので、課題となったの

は牧師就任感謝礼拝でした。当初の予定は延期し、いつ行うのか・行わないのか、行うとしたらどのような方法が可能か、という事について時間をかけて検討しました。その結果、ZOOM会議システムを用いて2020/11/3に行いました。

(連盟内では初めての取り組みだったそうです。)教会員は会堂に集いましたが、教会員以外の方は基本的にはZOOMによる出席をお願いし、み言葉の取り次ぎをお願いした高橋秀二郎先生もZOOMを通してメッセージを届けていただくという異例の形ではありましたが、普通なら遠方の為に出席できない方も出席できるという恵みもありました。こうしたノウハウを蓄積することで、礼拝に集うばかりではなく、交わりの苦手な方にも礼拝を届けることが可能になっていくことも考えさせられています。

「神のなされることは皆その時にかなって美しい」ことを信じ、感謝と希望をもって歩み続けたいと思います。

## 「公開か、非公開か、それとも限定公開か」

### 平塚バプテスト教会 平野健治

平塚教会ではコロナ危機以前より、ホームページ(HP)に力を入れていました。HPには毎週の宣教概要(コロナ危機以降は宣教全文)が掲載されています。HPの訪問者数を見ると、この5年間で6倍以上に増えていました。コロナ危機の中で、何かできることは無いかと考えたとき、HPのリニューアルを行うこととしました。この窓口からみ言葉に触れたいと願う人はコロナ以前から大幅に増えていたからです。

コロナ流行と共に、YouTubeによる礼拝のライブ配信も開始しました。礼拝のライブ配信については、公開の範囲が議論になりました。執事会での主な決定事項は、①ライブ配信自体は一般に公開すること、②礼拝出席者が映らないようにすること（出席者のプライバシーへの配慮）、③ライブ配信後は聖書朗読と宣教部分のみに編集すること（司会者への配慮、著作権の問題）になりました。できる限り公開してゆくという方針を取ったのは、これまでもHPで宣教を掲載し続けてきたことが影響していると思います。HPにしる、ライブ配信にしる、宣教を広く公けにしてゆくという前提があったからです。

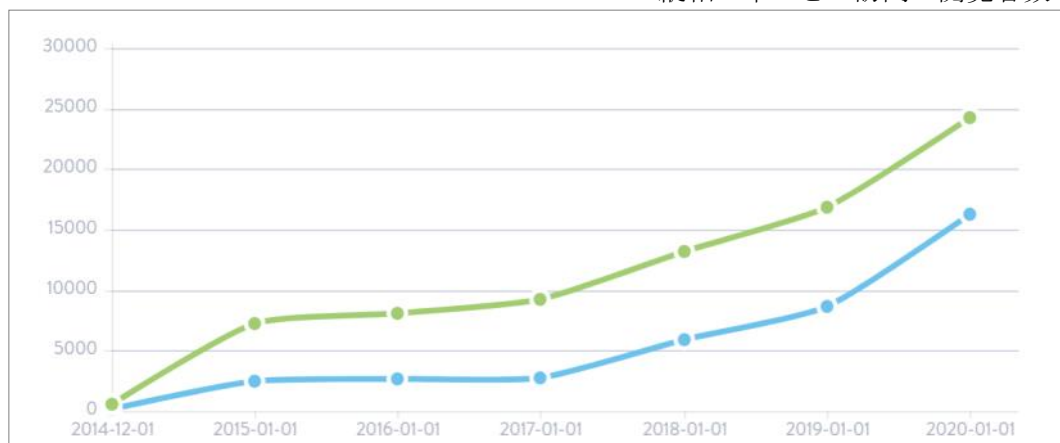
私たちの励ましとなったのは、このYouTubeライブ礼拝を見て教会に来られた方がいたということです。そしてその方は2020年12月に平塚教会に転入会をされました。まさかこのような形で教会に仲間が与えられることに驚き、励まされています。ライブ配信を始めてもうすぐ1年になりますが、礼拝出席者数よりも視聴回数は多くなります（礼拝出席25名前後、再生回数60回前後）。おそらくこのコロナ危機が終わっても、この配信は続けることになるでしょう。最近、教会・礼拝に興味があるという方には「ぜひ礼拝に来てください」とお誘いすると同時に「YouTubeでも様子を見る

ことができます」とお誘いするようになりました。

主の晩餐についても、様々な方法を模索しています。先日はYouTubeの一般公開において言葉による主の晩餐を行いました。これまで平塚教会の主の晩餐はクリスチャンに限るものでしたが、言葉による主の晩餐ではそのような限定はなくなりました。さらに一般公開されたライブ礼拝ではより多くの方が含まれたでしょう。しかし再び集いパンと杯をもって主の晩餐をするときに注意が必要です。「み言葉だけの時は全員があずかったが、今月から食べ、飲むのはクリスチャンのみ」と断らなければならないからです。ここにも「公開範囲」の問題があります。

いろいろな可能性と問いを与えてくれるライブ礼拝ですが、課題も残ります。全員が交わりのない礼拝の物足りなさや寂しさを感じています。きっと集う礼拝に代わるものではないのでしょう。しかし何か大きな可能性を持った入り口であることは確かです。コロナ以前からすでに始まっていた変化、コロナをきっかけに始まった変化を逃さずに歩みたいと思っています。

縦軸：年ごとの訪問・閲覧者数



青：平塚バプテスト教会年別のホームページ訪問者数、緑：同閲覧者数

## 「しなやかに」

### 1、賛美も礼拝も止まない

賛美の一年でした。声が消えても賛美は止まない。集まれなくても、生けるみ言の元に一同集まり礼拝は止みませんでした。「今までの様に」はなくなり、もう戻って来ないと思います。近隣の教会は、礼拝と祈祷会がやっと始まったとの声を聞きます。命への責任と無力をおぼえます。皆で考えた事も、判断の基準も揺れます。誰も責める訳でもないのに、集まる事を公表しづらい閉塞感を味わい、礼拝に向かう人を送り出す未信者の家族の思い。医療、介護、教育機関に従事する方々の緊張感を感じ、生易しくない現状を知ります。昨年4月の愛知県独自の緊急事態宣言発出時は、「集まらない」も選択肢にありましたが、「集まる」礼拝を決め、そのためにどうしたら良いかを皆で考えました。集まらない方々は、それまでも宣教師と繋がって来たLINEで礼拝に参加しました。礼拝を3回に小分けし、夜型の若者には午後礼拝に助けられました。教会1階フロア全てを用いて換気し、ピアノで歌う賛美の他、バンドが導く礼拝はドラム演奏を止め、アコースティックの楽器のみのリードで声を潜め賛美しました。現在は一日2回の午前礼拝に戻り、礼拝以外の諸集会全てリモート参加できます。

### 2、嬉しい出来事

この中で嬉しい出来事が。それは、青年のバプテスマ。そして障がいを持つ青年の礼拝の姿です。困難な病いも抱えていて、常に感染へのリスクが大きく、緊張しながら、夕拝ならば限

## 名古屋キリスト教会 山川明美

られたメンバーの参加のため、出席出来ると、彼女は持っている言葉の限りを使い歌い、子どもたちのダンスが始まると、彼女も全身を使って賛美します。「明美先生、立って！歌って！」と彼女に背中を押されます。コロナ禍だからこそ主が与えて下さった力、教会への喜びです。諸プログラムを止めたり、举行したり、今後もずっと流動的だろうと思いますが、この中で、リモート礼拝に疲れて、「集まる」教会を探して訪れる方々も少なくはありません。

### 3、南アジアの宣教師たち

そして、私たちの教会が派遣した宣教師の生活する地は、感染者がアメリカに継ぐ世界2位の国です。ロックダウンで8ヶ月間生活が閉鎖され、昨年12月やっと様々なコミュニティーがスタートし、教会も再開し、少し胸をなでおろしていますが、彼らの心はひっ迫した状況です。ただ家族皆の命が守られています。

### 4、乗り越えられる

2021年の幕開け間もない1/7、首都圏1都3県対象に緊急事態宣言が発出されました。元のリズムをとり戻そうとしている矢先、再び生活の自粛など、経済活動にも様々な打撃が再び訪れています。愛知県は1/7感染者431名、過去最





多を記録し、第3波への対応の強化が勧告される中、今年初めての緊急事態宣言が13日発出されました。しつこく手強い敵です。恐れが押し寄せては来ますが、決して支配されたくはありません。目を覚まし、気を

抜かず、しかし力を抜いてしなやかに乗り越えて行きたいものです。「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て」詩篇37：7  
2021年度の南名古屋の主題聖句を胸に抱きつつ。

## 「コロナ危機における東京北教会の選択」

東京北キリスト教会 山口千幸

2020/4/12のイースター礼拝から、私たちは会堂を閉鎖しWeb会議システムzoomを使用しオンライン礼拝を始めました。その後会堂の感染予防対策を講じ、6/14から現在まで会堂とzoomでハイブリッド礼拝をささげています。

4月の会堂閉鎖は、未知の感染症から会堂に来る方とそこご家族の命を守ること、教会から感染者が出た場合の近隣への影響を考慮し決断しました。私たちはビルの2階を借りて会堂としており、下の階は薬局、上の階には高齢の大家さんが暮らしています。影響は大きいと考えました。この決断に間違いはなかったと考えていますが、教会が、教会を求める人の前で会堂を閉じることの「痛み」は忘れてはいけないと思っています。

他方、オンライン礼拝には様々な恵みがありました。そのひとつは距離の壁がなくなることです。数年前インドネシアに転居された教会員家族と、zoomの画面上で再会できた時は本当に感激しました。

また5/31の那覇新都心教会との合同オンライン礼拝も嬉しい出来事でした。礼拝の進行を私たちが担い、岡田有右牧師には那覇新都心教会の会堂で説教をしていただき、両教会

合計65名での礼拝となりました。ふたつの教会が奉仕を分担し、ひとつの礼拝に共に与かるこの形には、今後色々なところで活用できる可能性を感じます。

私たちは礼拝で、聖書（聖書朗読）、説教、賛美を大事にしています。「NO賛美NO礼拝」な教会が、3月には聖歌隊の賛美中止、会衆賛美にも配慮を求める決定をしました。この点でオンライン礼拝移行は、各家庭で気兼ねなく賛美できる恵みでした。そのため奏楽はオンラインでも不可欠でしたが、ライブでの奏楽奉仕はどの家庭でも難しく、礼拝では、奉仕者が事前に録音したものを使用しました。この録音は奉仕者泣かせで、皆、練習の上に、納得のいくまで何度も録音をやり直すので、時には奉仕の喜びよりも、疲れを覚えることもあったようです。

現在に続くハイブリッド礼拝での奏楽は、会堂での奉仕、録音、『新生讃美歌CD』など、東京の感染状況を見ながら選択しています。そのような中でのイブ礼拝は、ひとりの方が自宅からライブで奏楽奉仕を担い、そのピアノ演奏に合わせて、6つの賛美歌をそれぞれの場で賛美することが出来ました。

## 新型コロナウイルスに直面して教会は・・・

感染拡大の中、私たちは様々な場面で選択を迫られました。礼拝は会堂に集いささげるとの、奉仕は会堂ですもの、主の晩餐は実際にパンとぶどう汁を食するもの。当たり前とっていたことが当たり前に出ない状況になった

時、主の御心がどこにあるか祈り求め、それぞれの事柄の意味を学び直し、話し合いを重ねて選択してきたことは、苦しみもありましたが、教会の神学を考えるよい機会であったと思います。

### 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている」

江波キリスト教会 杉本拓哉

表題は江波教会における今年度の主題聖句イザヤ43:19です。このみ言葉をいただき、2020年度の歩みが始まりました。私自身は4/26の礼拝で転入会の証をし、5/1からの赴任というスケジュールでした。しかし当時は緊急事態宣言下で、教会は4/19より集まったの礼拝を中止している只中、4/26の礼拝では、4月の説教を担われた教会員（松藤紀年氏）によるメッセージを代読し、転入会の証をしました（会堂では2名、LINEにて3名が出席）。教会員に証を配布し、書面決議により転籍・働きの委託を確認していただきました。その後も県内での感染状況を鑑み、会堂における礼拝の再開・中止を繰り返しています。そのような中、教会のLINEグループが広がり、現在は会堂に8名・LINEに8名ほどで江波教会の礼拝を献げています。

感謝な出来事も沢山ありました。一人の方のバプテスマ、家と教会までの距離がある教会員のLINEによる礼拝出席、LINEを通して司式・聖書朗読・祈りのご奉仕を担っていただいていること、月に一度のペースで行われている教会員の証、そのメッセージの中で、主の晩餐とはイエス様をご自身を分け与えられた出来事だと受け取りました。そして、それ

ぞれに与えられているイエス様を分かち合う「証」もまた、主の晩餐と通じ合うことに気付かされました。その上で実施することの出来た10月と11月の主の晩餐式に感謝します。祈られ支えられ備えられた38回のメッセージの一つ一つ、教会に来られ、会堂を整えてくださる方々、週報作成と送付のご奉仕、クリスマスの特別賛美、みんなで江波教会をキリストの体として建て上げられていることを実感しています。同時にイエス・キリストがこの江波の地まで来られたこと、そして諸先輩方がこの地で積み上げてきた歴史を覚えます。また、地方連合・連盟の交わりにより支え合っていることを感謝します。

恵みだけでなく課題も分かち合いたいと思います。LINEでの課題として、交わりが実感し難いことが挙げられます。礼拝後に皆さんから一言ずつ最近の出来事や礼拝の喜びを話していただいたり、誕生日のお祝いを歌ったりしていますが、交わりへの渴望は拭えませんが、交わりへの渴望は拭えませんが、LINEでは奏楽の音がぼやけて届きにくいという課題があります。対処として賛美の歌声は届くことから、司式者が賛美リードをしています。ZOOM礼拝の可能性もありますが、配信の技術面・有料会員の金銭面・各

ご家庭の通信環境面から、保留しています。

最後に祈りのリクエストをさせていただきます。私たちは2021/4/29に就任接手式を予定しています。身体的接触が危ぶまれている中、三密を避け

ながら、どのような時をもつことが出来るのかと、祈りつつ準備をしています。覚えて祈っていただければ幸いです。主を誉めたたえる時となりますように。栄光在主。

## 教会の礼拝事例を受けて

### 応答コメント

**濱野 道雄**（鳥栖キリスト教会、西南学院大学神学部教授）

「ミュートになっていますよ。」このセリフを1000回以上この一年間、Zoom等を使う時に口になさった方も少なくないと思います。こんな「あるある」を聞くと、「ああ自分1人じゃなかったんだ」と思い、少しほっとします。コロナの影響を受ける中、『礼拝さいこう』では礼拝事例の紹介も3回目になり、随分と多くのケースを分かち合っていました。「ああ、苦労したのは自分たちの教会だけではなかったのだ」と分かるだけでもほっとし、来週からも歩み続ける元気がもらえますね。

リモートと対面を半々で併用をしている教会も増えていますね（江波）。私も大学の授業での併用式を今後も続けたいと思っていますが、最初は「労力2倍で、成果2分の1」といった感じがしておりました。諸教会でも「時には奉仕の喜びよりも、疲れを覚えることも」（東京北）あって当然ですよね。各教会のお働きに敬意を表します。

それと同時に、新しい可能性も具体的にずいぶん展開されており、嬉しく思います。「牧師就任感謝礼拝」を併用式で行う（前橋）という、連盟内で初めての取り組みも行われています。コロナが収束しても、良い可能性の部分は今後も続けて

行われるのでしょうか。『礼拝さいこう』も、コロナ対応に留まらず、そこから礼拝と賛美をどのように考え、「アフターコロナ」における礼拝と賛美をどうしていくのか、対話に資するものにしたと江原室長から伺っています。

新しい可能性と検討事項として、ネット礼拝の「公開か、非公開か、それとも限定公開か」ということがあるでしょう。ネット礼拝で実際に教会につながる人が増えている教会（平塚）を複数で聞きます。「興味はあるけど、この教会の礼拝ってどういうものだろう？」という方々がネットの礼拝を見て、安心するのでしょうか。敷居が下がるのです。ある教会ではバプテスマ決心者が与えられたそうです。勿論、そこからどうバプテスマクラスを開き、他の教会員と良く知り合ってもらい、バプテスマまでの、そしてその後の日々を過ごすのかは、まだ手探りの部分があるでしょう。

このような可能性がありますが、リモート礼拝を誰でも見られるようにしている教会は多数派ではないかもしれませんね。福岡連合の宣教会議（2/13）や、ある牧師の皆さんとZoomで話した時に聞いてみたのですが、基本的に教会員に限定した礼拝や説教の配信を行っている教会の方が多

## 事例紹介に回答して

かったです。賛美歌の著作権や個人情報の問題が理由だそうです。それらは勿論クリアしなければいけません（教会音楽室も相談にのってくれるでしょう）、もっと言えば、ここには礼拝とは何か、説教とは何かを考えるときの二つの要素がぶつかっているのかもしれませんが。一つは礼拝そして説教とは公のものであり、もともと誰が参加しても聞いても良いものであることが求められているという事です。教会は自分たちのためだけにあるのではなく、他者のために（ボンヘッファー）、そして他者と共にあるのです。その一方でもう一つは、礼拝や説教は、前号で申しましたように「我—それ」ではなく「我—汝」、つまりかけがえのない具体的なあなたに向き合い、語り掛けるものだという事です。

そこである教会では二種類配信をしています。教会員用と誰が見ても良い用です。ある程度の技術が必要と思いますが、その教会では青年たちがそれをサポートしています。そのような若い人たち（あるいはセンスが若い人たち）に私たちは学ぶ必要があると思います。

あるいは、これは福岡の宣教会議で話されたことですが、「我—汝」の語りかけや集まりを配信する事で、この世界とは違うもう一つの「風景」をネットで教会の外にも視てもらい、そのようなことが教会にはできるし、求められているのかもしれませんが。聖書を通して、私たちが「イエスの居る風景」を感じ取るように、です。その時、私たちは私たちのままで、教会外の他者と共なる教会になるのかもしれませんが。

教会の外を考えることで、教会の中が元気になるのです。

今、日本でも女性や子どもたちを中心に自殺率があがり、世界中で格差が拡大しています。震災や水害などの災害の時、私たち教会はよく動きました。今もそういう時ではないでしょうか。地域は教会を見ていると思います。そうでなくても、希望を語り掛けるミッションが私たちにはもともとあるはずで。

もう一つ、新しい可能性と検討事項として、教会には「離れて共なるを知り、集いて異なるを知る」ことが求められているのではないのでしょうか。

「離れて共なるを知る」ですが、リモートで離れている今、「交わりへの渴望」（江波）を、「教会を求める人の前で会堂を閉じることの『痛み』」（東京北）を感じていらっしゃると思います。身体をもって共にいることがどれほど素晴らしい事だったのかを、あらためて私たちは知った訳です。

その一方で「新型コロナウイルスは私たちの関係を遠ざけ無関心にさせ、分断」（那覇新都心）することにも注意が必要でしょう。教会でも、対面礼拝に集まりにくい中、インターネットを使ったり、色々苦勞しながらもなお、自分の教会の礼拝に参加し続けるために、なぜ私たちが教会を形成しているのかがあらためて問われているのだと思います。そうでなければ、礼拝は見るものではなく参加するものなのに、インターネットにアップされた動画をテレビでも見

るように見てしまったり、ビデオを見るように、見ようと思ったら一週間経ってまだ見て無かったり、他所の教会の礼拝ばかり見てしまったり、といったことが起こってしまうかもしれません。

また先日、教会音楽室のZoomによる「教会音楽カフェ」でも、会衆賛美がままならないリモート礼拝で、また対面でも小声で賛美する時に、それが賛美になっているのか、という問いが語り合われました。小さな音で表現する事は難しいという技術的な面もあるでしょう。もっと言えば、隣の人の声や息遣いが聞こえない中で、礼拝に欠かせない要素である「共に神に応答する」ということを感じ取ることが難しくなっているのでしょう。もう一度、賛美とは何かを考え、そして離れていても「共に」つながって応答しているということを言葉にするなど工夫して確認し合う事が必要なのでしょう。その時、色々制約がある中でも、「声が消えても賛美は止まない」（南名古屋）でしょうし、「沈黙の賛美も神さまが与えてくださった恵み」（那覇新都心）であることが分かり、「歌詞をしっかりと味わうことができるようになった」（別府国際）という新たな恵みに開かれていくのかもしれません。

そして「集いて異なるを知る」です。これまでの事例を見てもそうですが、コロナによって、実は教会は異なる人々の集まりであった事がはっきりしたし、その対応に迫られた教会が少なくなかったと思います。これまでは身体を日曜に礼拝堂に運ぶことで、一つになっていたと思っていたかもしれない。しかし実は多様な人たちがそこいた。例えば主日礼拝に集う事も、実は身体、心、

仕事等に「恵まれた」人々にとってだけ「普通」であって、病院や施設にいる高齢者の方々にとってはそうではなかった。あるいは現在日本と世界を本当に支えていながら、不当な扱いすら受けていらっしゃる介護や医療等のエッセンシャルワーカーの人々等、日曜こそ休めない人にとっては「普通」ではなかったのかもしれない。このように多様な人々が共に生きる教会が、コロナ以前から求められていたのだと思います。

スパリアーという神学者が書いた『障がいのある教会』（Rebecca F. Spurrier, The Disabled Church: Human Difference and the Art of Communal Worship）という本には、障がいのある人も多く集うアメリカのある教会の様子が描かれています。その礼拝では賛美の仕方も、祈りのあり方もバラバラであり、そうならざるを得ないといえます。文字を理解しない人、大声で歌う人、歩きまわる人も勿論礼拝参加している。そして、その違いがこの教会の豊かさを作っているのです。この教会は複数の小さなプログラムからなっており、それはいろいろな時間、場所で行われています。コロナにおけるリモートによる教会プログラムみたいですね。そのとき、教会の中心は礼拝式だけでなく、中心となる場所も礼拝堂だけではないとスパリアーは言います。

では主日礼拝はどうでもいいのか、といえば、そうではありません。この教会にはいろいろな人がいるのだと知るために、主日礼拝は必要不可欠な、やはり教会の中心の一つなのだと言います。皆が集いますから、多少「居心地が悪い」思いを、障がいのある人も、無い人も、感

## 応答コメント

じながら過ごします。ある教会員はインタビューに対して、正直にその居心地の悪さを語っていました。しかし同時にその人は、それを上回って、礼拝にまた来たいという気持ちが強いのだとも言っていました。この感覚はとても大切だと私は思います。集まって違いを知る時、離れて共なることが分かる訳ですね。

「『教会』をダイナミックス（動態）として捉え」（鉦路）ることが大切だと私も思います。

コロナが収束しない今、「離れて共なるを知り、集いて異なるを知る」ならば、例えば大変重要なことですが、教会員や誰かが「たとえ患者になったとしても責めない」（那覇新都心）教会になれるのではないのでしょうか。コロナ感染のリスクも、ウイルスへの危機感や対策方法

も、礼拝や人と会う事への思いも、人によってさまざまです。どのように振る舞うかは、必要な情報と他の人との語り合いの後、その人に決定する権利があると私は思います。それは自己責任論ではなく、どのような選び取りをしたとしても、その結果「患者になったとしても」、支えるのであり、責めないのです。

そしてコロナが収束しても、この感覚は大切なことだと思います。バプテストはそれを「混乱」ではなく、「豊かさ」と呼んできました。今は私たちがまたバプテスト教会を形成する新たなチャンスになるのではないのでしょうか。

「信仰に基づいた合意形成の機会」（別府国際）です。

## 新しい賛美歌紹介

コロナ感染症拡大の危機にあつて、どのような賛美歌に光りがあてられ歌われているのでしょうか。様々な語り合い、情報交換を通して紹介された賛美歌2曲をとりあげます。（参考文献:『讚美歌21略解』）

### 「どんなものでも」

『讚美歌21』478番

ドイツのエルフルトに1569年にペストが流行し多くの死者が出した際に、町を逃れてゆく親しい人のためにルートヴィヒ・ヘルムボルトが作詞したもので、ドイツでは、苦難の時の慰めの歌として広く歌われています。引用聖書箇所ローマ8:31-39に基づいた歌詞、「どんなものでも この私を神より離すことができない。」のみことばが励ましを与えます。

「教会音楽カフェ」後の感想投稿の中で、木村まどかさん（大泉）より「今わかちあいたい賛美歌」として紹介されました。

### 「また会うその日まで」

『讚美歌21』541番

アイオナ共同体のジョン・ベルの危機に直面する中創作した賛美歌 “We will meet, when the danger is over” 「わたしたちは会いましょう、この危機が終わった時には」がyoutubeで紹介されていますが、『新生讚美歌』366番「神ともにいまして」が重なり響きます。同詞の『讚美歌21』541番では、新訳に、従来の組み合わせとは別のヴォーン・ウィリアムズの旋律が付され「神が共にいて守られますように」がくり返し歌われます。

## 瑞穂キリスト教会 木内 汐路

2020/11/15、Zoomを利用し富岡真奈さん（上尾教会）を講師に、奏楽者講習会を行いました。瑞穂教会や自宅から計8名が参加し、実演も含め主に賛美歌のアレンジを教えて頂きました。以下、参加者の声、講師の先生のコメントをお届けします。これを機に更に奏楽者の交流が広がります様に願っています。皆様の教会でもはじめてみませんか？

●大橋ルツ子 富岡さんと秋山牧師の計らいで、思いもしなかったZoomを使つての研修会が急きょ実現できました。感謝！良かった点は、ピアノを弾く手元がよく見えた事と遠方に住んでいる方も、子育てしながらの方も自宅から参加できた事です。改善点は、音が聞きづらい時があり、通信の環境を整える事が必要だと思いました。これからもオンライン研修会はありかなと思いました！

●野崎さやか 今回コロナ禍のおかげで、名古屋と埼玉という距離を越え、Zoomという形でも音楽研修会ができることを実感できた上、奏楽者同士の良き交わりの時になりました。



富岡さんからは講習会後もアレンジの音源を送って頂き、とても勉強になりました。

日頃時間がとれず、それぞれの奏楽に対しての思いなどもわからあえないので、このような機会を通してまた気持ちも新たに奉仕していきたいと思いました。

●秋山愛 ピアノに対して苦手意識がかなりありましたが、いかに簡単に上手そうに弾くかそのコツを教えてもらったことと、褒め上手な先生のおかげで、10年ぶりにピアノに触ろうと思えました。いつか奏楽ができたなら、という目標もできました。今まで散々挫

折してきたピアノなのでいつまでこの気持ちが続くか分かりませんが、とても素敵な機会を頂けたことに感謝しています。

●榮雛花 なかなか奏楽について教えて頂く機会がないので、とても勉強になりました。特に私はアレンジの仕方が分からなかったので、色々左手の形など教えてもらい嬉しかったです！その後の奏楽のときに、『僕たちのメリークリスマス』を教えてもらったように弾くと、自分も会衆も楽しんでるな、と感じました。私は、奏楽をすることはあまりないのですが、色々応用していきたいです。

●木内汐路 コードでアレンジの幅が広がるのとこのことで、コードを覚えたいです。『新生讃美歌』もコード付きの楽譜があればいいですね。

●富岡真奈(講師) この度は瑞穂教会の素敵な奏楽者さんたちと共に教会音楽について学ぶことができ、感謝でした。皆さんの熱意にむしろ私の方がエネルギーたくさん頂きました。時間や経済的なことを考えると遠方の教会に行くのは困難だと思っていましたが、オンラインレッスンであればその課題がクリアされ、これからの奏楽者育成に大きな可能性を見いだせたような気がします。瑞穂教会の礼拝音楽がますます豊かになっていくことを心から楽しみにしています♪



## 「歌わない」ということ

片山 寛（和白バプテスト教会、西南学院大学神学部教授）

礼拝に会衆の一人として集うということの最高の喜びは、私にとって、誰が何と言おうとも、「讃美を歌う」ということです。声を合せて、上手な人も下手な人も一緒に神さまへの讃美を歌う。それはたぶん「崇高な」というより「人間的な」喜びなのだと思いますが、その喜びはとても大きいのです。神学者アウグスティヌスは『音楽論』の中で、音楽が霊的なものと肉的なものの中に位置することを認めています（第6巻11章以下）、そうした肉体的な「心地よさ」を通じて表現されるものの中には、疑いもなく、最も清らかで崇高なものがあるのです。アウグスティヌスは自分が若い頃、しばしば音楽を聞いて涙を流したことを告白しています（『告白』X, 50）。

コロナの流行で、思い切り歌うことができない、という状況が続いているのですが、その制約された中で、私は、キリスト教は過去に何度も、「制約」をより高い発展へのきっかけにしてきた歴史を持つことを思い起こすのです。ローマ帝国の迫害下でその後の発展いしずえの礎となる神学（三位一体論）を形成していったこと、楽器を使えないという状況下でグレゴリオ聖歌という新しい音楽理論を発展させたこと、14世紀から続く「黒死病」という疫病の中で、ルネサンスと宗教改革を準備

していったこと。なぜそれが可能だったのでしょうか。それはキリスト教が、目の前の現実を認めながらも、その向こうに、より究極的でより崇高な解放を「鏡におぼろに」ではあっても見続ける宗教であったからだと思います。その意味では、今回のコロナ危機の中でも、世界のどこかで新しい「讃美」のかたちが生み出され、継承されていくに相違なく、私はそれに大いなる期待と、その時代に居合わせた喜びを感じております。そのヒントは、「天使たちの合唱」にあるのではないのでしょうか。

ドイツの讃美歌作家ヨッヘン・クレッパー1903-42の生涯を振り返ると、しだいに暗くなってゆく時代の中で、彼が勇気をふるい起して、常にその向こうの朝を夢見ていた人であることを思われます。クレッパーはシュレジエンの牧師の子どもに生まれ、神学校にも行ったのですが、健康上の理由で進路を転換し、ジャーナリストになる道を選びます。ベルリン放送（ラジオ）に職を得るのですが、1933年にヒトラーがドイツの首相となると、クレッパーがSPD（社会民主党）の党员であったという過去をとがめられて解雇されます。放送関係の雑誌社に勤めながら文学活動をするのですが、小説『父』が評判になると間もなく、今度はドイツ作家連盟から



追放されて、これ以上作品を発表するのが不可能になります。歌うたいが声を奪われるように、彼は表現手段を次々に奪われていくのです。しかし彼はこの時期、数々の美しい讃美歌を書いています。その中のひとつは、『新生讃美歌』560番にも採用されていますが、ドイツ語を直訳すると、こんな歌です。

夜は深まった、朝は遠くない。  
だから今、明けの明星に向かって  
讃美を歌おう。  
夜じゅう泣いた者も、  
喜ばしく声を合せよう。  
明けの明星はあなたの不安や痛みをも  
照らしてくれる。

クレッパの讃美歌は、神さまはこの地上の暗闇にも来てくださる、いやこの暗闇の中にこそ来てくださるのだ、という強い信頼と信仰を歌ったものが多いのです。アドヴェント、つまりキリストの降誕を待つ教会の讃美歌を沢山書きました。そこで彼は、「アドヴェントの詩人」と呼ばれることがあります。

クレッパの妻ハンニはユダヤ人でしたので、妻と二人の娘に強制収容所送りの危険が迫ります。ハンニは1938年の12月に洗礼を受けてキリスト教徒となるのですが、それでユダヤ人迫害を免れることはできませんでした。

第二次世界大戦が勃発（1939年9月）する

少し前に、クレッパは長女のブリギッテをイギリスに亡命させることに成功します。次女のレナーテはまだ子どもでしたので両親のもとに残ったのですが、間もなく戦争が始まったので、状況は絶望的になりました。妻ハンニと強制的に離婚させられ、ハンニとレナーテが強制収容所に送られるという運命が決まったとき、クレッパは妻と娘と一緒に3人でガス栓を開いて自殺をします。それは1942年のアドヴェント、12月10日の夜のことでした。

それは悲しい最期でしたが、不思議なことにクレッパの歌声は、声を奪われることでもますます強く天地に響きわたったように思えるのです。クリスマスの夜に、ベツレヘムの野原で天使たちが歌った時のように、この世界が暗ければ暗いほど、天使の歌は明るく響きわたるのです。

さきほどの歌の4番は次のような歌詞です。

今もお多くの夜が、  
人間の苦しみと罪責をおおっている。  
しかし今、すべての星々と共に、  
神の慈愛の星が動いている。  
その星の光に照らされて、  
もはや闇は続かない。  
神の御前から、あなたがたに  
救いが来たのだ。

# コロナ危機の中での礼拝 一教会の取り組み

コロナ危機の中、感染状況が変化する中、各教会は状況ごとに対応を迫られてきたのではないのでしょうか。山形教会より、感染レベルに応じての礼拝、集会の実施の有無についての指針が寄せられました。参考となるとりくみとしてご紹介します。

## 山形キリスト教会の取り組み

山形キリスト教会 青山祐一

全国的には現在、第3波と言われていますが、感染が落ち着いている山形県は昨年11月頃からの第2波の中におり、感染がより身近なものになってきました。執事会では「感染状況に応じて対応を検討する」として運用をしており、目安はあるものの、東北連合や山形市内の教会の状況なども勘案し、判断していました。

感染状況の受け止め方がいろいろある中で、

「みんなが理解して、安心して礼拝や諸集会に集うことができれば」という願いから、礼拝・音楽委員会で原案を作成、執事会で検討し、総会での分かち合いから一部修正をして運用しています。

感染状況と集会内容を可視化、共有化することによって、お互いに納得、確認しながら進めることができます。

感染レベル	感染状況	主日礼拝形式	賛美	主の祈り	交読文	司式者の祈り	主の晩餐式	教会学校	祈禱会	各会委員会	聖書カフェ
4	緊急事態宣言	無会衆礼拝	○	○	○	○	×	×	×	○	×
3	新規感染者平均6人以上	自主礼拝	○ 節数制限	×	×	○	×	×	×	○	×
2	新規感染者平均3人以上6人未満	縮小礼拝	○ 節数制限	×	×	○	○	○	○	○	○
1	新規感染者平均3人未満	通常礼拝	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※感染状況は、山形市内の新規感染者の1週間当たりの平均人数で判断する。

※感染レベルが変わった場合、その都度速やかに連絡する。

※教会員が感染者、もしくは濃厚接触者の場合、すぐに感染レベル4（感染程度4；無会衆礼拝）とする。

※感染レベル4（感染程度4；無会衆礼拝）の場合、牧師と奉仕者のみで礼拝を献げる。

※全国的に『緊急事態宣言』が発令された場合、山形市内の感染者数に関係なく、感染レベル4（感染程度4；無会衆礼拝）とする。

## 第1回「教会音楽カフェ」報告



連合別出席人数：東北 (3)、北関東 (7)、東京 (6)、神奈川 (3)、西関東 (1)、中部 (2)、福岡 (1)

2/2(火)13～15時、「教会音楽ネットワーク」(教会音楽メルマガ)、地方連合教会音楽担当者への呼びかけ他を通して総勢23名が、それぞれ飲み物は持参で、ウェブを介して集まり、「**礼拝と音楽、賛美すること、歌うこと**」をテーマに語りあいました。

以下、参加者の感想をご紹介します。

**次回は3月2日(火)13～15時**

**テーマ:主の晩餐 どうしてる?**

お申し込みはこちら <https://forms.gle/qTiSeFhFSRhpRTbq8>

### 水戸バプテスト教会 庄司恭子

コロナ禍で閉塞感を感じながらも様々な可能性を知り、賛美すること、礼拝することについて考えることができました。集まることが難しく、場所や時間を共有した礼拝や祈り、賛美、学びが思うようにはできませんが、このような中であってもzoom等オンラインで可能になっていることを感謝したいと思います。また、オンライン礼拝がテレビ感覚になってはいけないと思われました。

### 所沢キリスト教会 森田愛子

長引くコロナ渦の中で私たちと同じようにそれぞれの教会がいろいろな形で礼拝を守っていること、悩みや戸惑いを持たれていたり、工夫されていることも知ることが出来ました。お話を伺いながら、あの時、あの場にいた皆さんと神様に礼拝を捧げるという同じ思いで繋がっていることを強く感じていました。そして、あらためて、教会に集い、声を合わせて賛美できることの恵みの深さを感じ、出来ないのではなく、今、出来ることに目を向けて、会堂に集まり、皆で賛美が出来る日に備えていけたらと思っています。

### ふじみ野バプテスト教会 児玉佐代子

小声で歌うことが賛美と言えるのか、反対に小さな声で歌う事は賛美ではないのか?という問いかけは興味を引くものでした。今まで私達が当然と思って捧げる事が出来ていた礼拝は、お互いの声や息や暖かさを感じながらのもの(実はこれはものすごい恵み)だったのですね。その当然と思っていた事が、当然でなくなった事をネガティブに捉えずに何か新しい形を生みだしていけるチャンスだと考えて行けたら...と思えました。

### 西川口キリスト教会 山嵯美奈

いろいろな立場の方々が一堂に会し、ひとつのテーマで話し合えたことは印象的でした。現在コロナウイルス感染予防のとりくみによって、礼拝スタイル、生活スタイルがかわりつつあり、それぞれ適合しようとしていろいろな工夫がされている状況ではあるものの、まだまだ割り切れない困難と渇きを覚えている私たちの姿が浮き彫りになりました。そして賛美(特に会衆賛美)が私たちの信仰生活に多大な影響を与えていることを痛感し、同時に、そもそも会衆賛美とは何か?なぜそれほどまで必要なのか?誰のために歌うのか?そのように賛美について深く考えをめぐらし、意見交換をする機会となりました。

## 礼拝と賛美歌著作権 Q&A

**Q:** ある賛美歌の楽譜をコピーして使用したいと思っていましたが、作者が海外の方で、その著作権が有効と言われました。それなら、楽譜を用いずに、日本語の翻訳歌詞だけ書き出して印刷すれば、問題ないですか？

**A:** 『新生讃美歌』には、世界のさまざまな言語で作られた賛美歌が、日本語に翻訳されて載っています。世界の賛美を私たちも自分の賛美として歌うことができる恵みを感じます。

そんな多くの翻訳賛美歌を用いる際、実際に歌ったり、紙に記す言葉は日本語であっても、実は原語の歌詞の著作権管理者の許可を得る必要があります。

元々の原語での詩を実際には使わない場合でも、翻訳したものはゼロから生み出されたオリ

ジナルのものではなく、その歌詞の元となる別の言語で作られたオリジナルがあり、そこから派生して作られているためです。

翻訳の賛美歌は、元々の作者の祈りと証に翻訳者の祈りと証が重なって、一つの賛美歌となっています。

作者と訳者、両方の思いを受け継いで歌うのと同時に、両方の権利も大事にして賛美歌を受け継いでいきたいですね。

(実際に使用する際の手続きは、楽曲により異なります。詳細は教会音楽室へお問い合わせください。)

※『新生讃美歌』使用許可申請不要リスト(インターネット動画公開用)は2021年度末まで期間を延長しました。尚、上記リスト内の以下の曲は、再調査の結果、リスト外となりましたのでご確認ください。

264「霊の火燃やしたまえ」、388「罪の世にすめる」、426「語りませ主よ」、621「われに従えと」。

## 尊いお働きを覚えて

### 大谷レニー先生の長きにわたるお働きに感謝し、主を讃えます。

2021年2月14日、長年、主の業に、教会の働きに、日本バプテスト連盟の教会音楽のために従事された大谷レニー先生が、「いつくしみふかき」「罪ゆるされしこの身をば」「いつも喜んでいなさい」の賛美歌を賛美される中、天に召されました。1961年3月21日に日本に宣教師として来日され60年を迎えるところでした。

大谷レニー先生は、大井バプテスト教会の教会音楽の働きをはじめ、日本バプテスト連盟の教会音楽、推進と研修、教会音楽出版

物、『新生讃美歌』編集・出版、東京バプテスト神学校での教会音楽人材養成、他、様々なお働きにご尽力され、その影響は数限りなく多くの方々に及んでいることは、周知されるどころです。大きな悲しみの内にありますが、信仰継承にたって、礼拝と賛美に仕えていきたいと決心を新たにしています。先生が作られた賛美歌は、私たちの証しの歌として生き、歌い継がれていくことでしょう。大谷レニー先生、ありがとうございました。そして、先生を用い、様々な働きに遣わされた主を讃えます。(江原美歌子)